



## 小野英夫先生のご定年に寄せて

— 感謝の辞 —

佐々井 利 夫

明星大学の草創期を支えたお一人である小野英夫先生のご定年によるご退職は、創立50周年を間近にした本学の節目の象徴のひとつであるように、私には思われる。先生は、本学創立の4年目である昭和42年4月より本学にご勤務され、長年にわたり本学の発展に貢献されてこられた。近年、創立当初から本学にご勤務された方々が相次いでご退職になり、また改組改編が進められ、キャンパス再開発も進行して、本学はまさに新しい時代に向かって脱皮の途上にある。変貌を遂げてきた本学の現状を、先生はどのように思われているのであろうか。

今日では創立間もない日々にご勤務された方々のお話を直接うかがう機会がまれになってきたが、先生もご体験のなかで多くのエピソードを紡いでこられ、また見聞されてこられた。本学の発展のなかで過去を振り返る機会は少ないが、創立当初の多様な業務に追われた先人のエピソードのなかにも、困難な時代を迎えている本学の今後への示唆もあるのではないとも思われるのである。以下において、先生からいただいたご厚誼にいくつか触れつつ、個人的な思い出とともに感謝の辞を記したい。

私は昭和50年から本学に勤務したが、小野先生はすでに気鋭の研究者としてご活躍中であつた。親しくご面識を得たのは、その年度の入試業務からである。当時の本学の入試は推薦入試と一般入試のみであつた。いずれもA面接・B面接と称して受験生は同日に2回面接を受けていた。一般入試では筆記試験日と面接日がある2日制の入試であつた。先生はB面接の受験生をどの面接担当教員に振り分けるかという作業されていて、その補助として私が加わつた、という次第である。その時代は多くの受験生がいて、一般入試では理工学部、人文学部の2学部でそれぞれ2日間、計4日間の日程であつた。多くの受験生を狭い教室で適切に誘導することは、迅速な判断と指示が必要であつたが、先生はその作業を楽しむかのように取り組まれ、長時間の作業で疲れがちなスタッフを軽い冗談を交えて明るく励まされていたことが印象に残っている。

昭和53年頃のことだと記憶するが、先生が理学博士号を授与されたことによる仲間内のお祝いの会の末席に参加させていただいたこともあつた。また、私が本学の公開講座を担当しているときに講師をお願いし、ご快諾いただいたこともあつた。こうしてご面識を深めた私は、学内でお会いするたびに親しくお声をかけていただいくこととなった。廊下でのすれ違いなどで、「やあ、元気？ いつも大変だね」と例の明るい声で話しかけられ、ちょっとしたご配慮の言葉に、諸業務で疲れ気味の気分を一瞬癒されたことも多い。

先生は理工学部所属、私は人文学部所属ということもあり、日常的な共同仕事はなかつ

た。しかし、私と同じ教育学の先年ご退職された森下先生や加藤先生は小野先生と親しく、両先生との会話のなかに時折「小野君は……」といった内容があった。こうしたことから先生はいつも身近に感じられていた。大体が農作業についての話題であった。小野先生はご自宅で「農作業」をされており、その道の「ベテラン」であることは、親しい方々にとっては周知のことである。そういえば昨年末、教育学部支援室の花瓶に溢れるばかりのバラの花が飾ってあったが、小野先生からの贈り物であったことが思い出される。教育学部が設立され、同じ学部所属になったことにも特別のご縁が感じられるのである。

先生は算数科教育と数学領域の教科を中心に講義されていた。私は専門外なのでそれらの教科を同じ方が担当することは無理がないことだと考えていた。しかし、先生の後任人事を進行する過程で算数科教育と数学の両方をご担当できる人材が少ないことを思い知ったのである。言い方を換えれば先生が両方を担当されていたことは、まれなケースといえるのである。おそらくご苦心があったのではないかと推測されるが、そのことを先生は表面に出さずに淡々とお仕事されていた。通信教育課程においても、先生はテキストの作成やスクーリングなど、長年にわたり大活躍であった。

今後も、ご健康にご留意され、「晴耕雨読」の合間に時々本学にお越しいただき、あの明るい笑顔で後輩たちを激励していただきたく、最後のお願いをして感謝の辞といたします。